

【高齢者の現状 2】

東海社会福祉科学研究所

大北 秀雄

2 高齢者の日常生活

(1) 活動範囲

①個人差はありますが、地方では車がなければ活動範囲も狭くなり、そのため一定の条件が自然に設けられる社会です。病院に行くにも、買い物に行くにも、子どもたちのところに行くにも車が必要条件となっています。駅に行くのも車が必要ですし、駅までに行くのもバス停までの距離とバスの本数が減っているために時間の条件があります。

車をどこまで使えるかによって人生が大きく変わってくるのも現実です。旅行にいくにも、趣味を活かした生活を行なうにも車が影響してきます。車がもともと無ければ二輪車や自転車の活用があるわけですが、その行動範囲は車を利用している人より狭くなっているのも現実ですし、車に同乗させてもらうことも出来ませんがその場合にあっても条件が発生します。

②車を持つことは、どうしても必要な経費があります。ガソリン代、点検費用、自動車税、オイル交換費用、任意保険費用、高速料金、車検費用などが必要です。その金額は年間 30 万円程度必要ですし、車の減価償却を併せて考えると 50 万円を超えているのが現実です。また、何かトラブルが発生すればいろんなことに神経を使いますし、経費も必要となりますが、それでも車を持たなければいけない社会になっていることも現実です。

年金生活者にとって車の経費は、生活費の大きな割合を占めることになっています。中元、歳暮、慶弔費よりも大きくなっていますので、その経費内訳を確認することも必要です。そのことに気がつけば、車の利用方法が今以上に価値のあるものになっていくものと思います。

③高齢者にとっては、運転免許書の返還時期を何時にするかが大きな問題となっています。反射神経、耳、目、運動神経などがどの時点まで運転できる状態なのか心配ですが、高齢者家族、独居ではなかなか判断が難しいのも現実です。認知症になってもそれがどういうことになるのか判断ができないのも現実ですから難しい問題として残ってしまいます。

④高齢者にとっては、「買物難民」にならないような状態が現実で。商業施設等の郊外移転により、今まであった八百屋、魚屋、何でも屋などが地域からなくなっています。買い物したければ車が必要になってきます、品物、金額を考えると必然になってきます、日常生活の一環であり、贅沢の生活ではないのも現実です。何を購入するにも場所を検討しなければいけない社会ですし、どこに利便性が存在するのかも理解が難しいです。

映画に行くのも、講演会に行くのも、鑑賞に行くのもその行き方を考える必要が大切な事項となっています。人口の流れを考えれば、現在よりも「生活はさらに自動車依存」を深める方向に進んでいるように思われます。便利な社会が、日常生活を考えるとどこに存在するのか疑問を持ってしまいます。

若い時に感じたことが、高齢者のことを考える世代、高齢者になる世代になってくると、何と難しい日常社会であることが肌で感じることになり寂しくなります。